

[完結]FIA—F2  
WorldChampionship  
story of speed Final  
season

九嶋輝

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

昨シーズンはスランプになったりと色々ドタバタしながらも2年連続ランキング3位と大健闘して納得いくシーズンとなった。そして俺は新たなチームで迎えるF2最後のシーズン開幕!!そして感動のラストも見逃すな!!

# 目次

Round 0	Anfang	1
Round 0.	5 このチームとの出会い	5
Round 1	波乱の幕開け (オーストリアGP)	7
Round 2	2連戦 (シユタイアマルクGP)	10
Round 3	ポデイウムラッシュ (ハンガリーGP)	13
Round 4	イギリス2連戦の1戦目 (イギリスGP)	17
Round 5	2連戦の2戦目 (イギリスGP)	17
Round 6	シーズン折り返し (スペインGP)	21
Round 7	Shout & Loud	24
Round 8	勝利するよりも大切なこと (イタリアGP)	31
Round 9	cool & hard (ムジエロGP)	33
Round 10	Overture (ロシアGP)	37
Round 11	Gomy Road (バーレーンGP)	40

	最終回	Round 12	ソラニカザシ	
	タテノヒラ	(サクヒールGP)	—	45
	Round 13	エピソード	—	55
	Round 14	エピソード	その2	
58	特別企画	今シーズンのエントリーリス		
62	ト及び各チーム	毎のプレイバック		

# Round 0 Anfang

前年度は、スランプに見舞われながらも、不死鳥の如く復活を果たし、2年連続で、年間ランキング3位に食い込んだ俺。そんな興奮冷めやらぬ中迎えた、アブダビでのポストシーズンテスト。このテストは、前回の2nd seasonで説明した通り、自分との相性ピツタリのチームを見つけて契約して、1年間ないし複数年走り抜くという所謂、「チームの下調べ」にも等しいのである。このテストで俺は、前々から目をつけて交差していたチームがひとつあり、そのチームのマシンに乗ってみたくてたまらなかつた。そのチームというのは、昨年いきなり出てきて、表彰台かつさらいまくった「ユニ・ウイルストウオーシ」という、一昨年まで参戦していた「RTロシアンタイムズ」の母体となるチームである。実はこのチームと、あと1つ乗るチームがあつて、そのチームの名前は「ハイテックレーシング」という今年度から新規参入したチームだけど、F3とかのカテゴリーだと、割と強豪チームとして、名高いチームだけど、F2だとうなるのかも確かめたい所だ。そしてテストの日になり、俺は初日に、ユニ・ウイルストウオーシに合流して自己紹介等を済ませて、いざマシンに乗り込むと、何やら見慣れたやつが1人いる。まさかだと思うけど、一昨年俺の担当メカニックだった、ギャレットじゃな

いか!! また同じ職場で会うとは、これも何かの縁だと思つたね。ギャリーは無線で「あれ? ヒカルじゃないか!! まさかお前とまた同じになるとは思つてもなかったぜ!!」俺も無線で「俺もだよギャリー。また同じ職場で会うとはね。まあ今日1日楽しませてもらうよ。」とコミュニケーションをとっていたが、さつき俺がギャレットの事をギャリーと言っていたのは単純に呼びやすいから。本人も結構気に入ってるから助かるよ。そして走行開始の合図と共に、俺もコースインをした。さてと、このチームの車両特性のお手並み拝見と行きますか。そして最初の1周ゆっくり走つて2周目から全開走行開始。それにしても、昨シーズン乗っていた、ARTGPのマシンより扱いやすくて、乗つていて非常に落ち着くマシンに仕上がっていた。でもこのテストは、13インチタイヤ最後のテストでもあり、特性もある程度理解していた。俺は、フルに特性を活かして走り込んだ結果、8番手タイムと、このチームでの初走行にもかかわらずこのタイムは納得いくタイムだった。そしてピットに戻つて改めて俺はギャレットにお礼をした。「扱いマシンセッティングをしてくれてありがとな。おかげで走っていて楽しかったよ。」とお礼をしてギャレットからも「俺が車を弄ると何故か必ず扱いやすくなる。自分でも不思議でたまらない。だけどもまたお前の笑顔が見れてよかったよ。」といい俺は初日を終えて迎えた最終日。俺は、ハイテックレーシングに合流したが、マシンカラーがあまりにもカッコ良すぎてしばらくフリーズどころか思わず「シルバーアローだ!!」と叫びそ

うになったが、その気持ちを押し殺して最終日に臨んだ。そして自己紹介等を済ませていざシルバーとブラックに塗られたマシンに乗り込み走行開始。そして全開走行時にふと気づいたのが、新規参入チームにも関わらず、ここまで攻めたセッティングをするチームはあまり居ないという事だ。何故かと言うとマシン特性は昨年の俺の機体と類似してるとまで行かないがかなり似ているのだ。まああそこまで暴れないだけいいよ。でも結果から見るとタイム的に初日の方が早かった。やっぱりこのチームの場合マシンに手を焼き10番手に入るのがやつとだった。そしてピットに戻って俺は良い所とダメな所を指摘した。良い所はストレートでは抜群の安定性がある所。ダメな所はコーナリング中ダウンフォースが若干不足気味な所。そしてコーナー進入時にドリフトしてるみたいになってる所。あのさ、Motto2マシンじゃないんだからさ、ちゃんと曲がりましょう。あつ、ここだけの話だけど俺は1回出光ホンダチームアジアのMotto2マシン（カレックス）に乗った事あるけど、あの時は普通に曲がるよりスライドした方が早くてよく滑らせてたけど、この場合は話が違うのでちゃんと曲がろうよ。そういう所を指摘してチームも「いい研究材料になったよ。ありがとう。」と言ってくれて俺も「いい材料を提供出来て良かったよ。ありがとう。」とお礼をしてポストシーズンスターは終わった。そして俺は、初日に走ったユニ・ヴィルトウオーシと契約を交わし、2020シーズンのFIAF2世界選手権にエントリーする事が発表され、ナンバーも、

昨年同様3番になり、昨シーズン後半から加入したレッドブルジュニアとホンダの支援も継続して行われる事になった。そしてマシンカラーは、レッドブルカラーとなり、スポンサーにはカシオとブシロードとオーディオテクニカが継続して就いてるのと、サイドポンツーンにはレッドブルのロゴ。そしてサイドプロテクターには、俺の名前と日の丸とかなりカッコ良く仕上がった。後はスポンサーに俺が愛用してるAraiが就いており、レーススーツのワッペンにもAraiのロゴが縫い付けられている。さあ最後のシーズンを戦い抜く準備は出来た!!次回は開幕戦オーストリア。お楽しみに。そして晴南もカーリン・レーシングから、今季のF2にフル参戦する事も同タイミングで発表された。



## Round 0. 5 このチームとの出会い

俺がヴィルトウオーシと出会った事は、RTロシアンタイムズ時代の2018年まで遡る。このチームの強さはよく知っていた。プレマと同等だと言う事を。そして、俺の歯車が狂い始めたベルギーGPを迎えた。俺はレース前に誠真といつも通り雑談していて笑っていた。まさかそれがアイツと交わす最後の会話、アイツが見せた最後の笑顔になるなんて、誰も知る由もなかった。マシンが続々とオーラージュを通過してラディオンへと向かった。その時だった：アイツのマシンはイン側のランオフエリアのスピードウォールへとオーバースピードで突っ込んだ。フロントウイングを吹っ飛ばしながら。そして、衝撃で跳ね返ってコースへと。その直後に：すぐ後ろのマシンが減速しきれずに激突。モノコックが破壊され、体半分露出する格好になり、首もグラんとしていた。俺は減速して停止した時に、メット越しに見えた修羅場に動揺していた。それからこのチームとの関係が始まった。代表が「辛い気持ちは良く分かる。もし、我々に何か出来るのであれば：」と俺に話しかけてくれた事がきっかけに関係がスタートした。シーズンが終わる度に「俺の所で走るかい？」と気にかけてくれていた。実際にオフアードまで出して来ていた。けど、俺は「オフアードは、本当にありがとう！けど、A

RTでやり残した事があるんだ。気持ちだけでも受け取っておくよ。でも、来年は絶対ここで走るから！」と言つてARTで走つた後に「今シーズン、」と代表が言おうとした所で「ここで走る！去年の約束果たしに来たよ。一緒に王者取り行こうよ。」と言つて約束通りヴィルトウオーシで走る事を決めた。俺は「シャシーに関しては何も聞かないで欲しい。するのならば星奈が使つたシャシーを持つて来てくれ。そのシャシーに全てが詰まつてる。今までの全てがね。」とリクエストをした所、すんなりと承諾してくれた。そしてステアリングは、誠真の物を流用という「3人の絆」を示す形になった。実はこのチームとの契約自体は、昨シーズン時点で結んでおり、メディアも俺の動向に注目していた。俺はSNSで「匂わせ投稿」を多数行つており、フィーダーシリーズをメインに扱つてるメディアや、ファンからは「来季はヴィルトウオーシで走るのか？」と噂が立っていた。ファンの間でも「来季はカーリンに復帰かと思つた!？」等と驚きを隠せなかった人が多数見受けられた。それもそのはずだ。だって英国籍強豪チームはカーリンなのだから。予想合戦では、やれMPだのカンポスだのハヤテだのとほぼ大ハズレな回答をする人が多数現れた。でもニアピン回答をする人も多く居た。中にはドライバー編成の予想合戦も展開されていた。ドライバー編成が判明した瞬間に「くっしー選手逃げてえゝ(。 ㄩ。 じ) / 三」「ヤバい奴来たな。つて昨年と一緒にかヤバいつて!!」等とTwitterは大荒れになったりもした。

# Round 1 波乱の幕開け（オーストリアGP）

前は、アブダビでポストシーズンテストの様子をお送りしたが、実は一つだけ抜けていたことがある。それはバーレーンでのテストの事だ。ここで超ザックリ言うと、まだマシンと18インチタイヤに上手いこと馴染んでなくて感覚を掴む為にひたすら走り込んでいた。というのがバーレーンでのテストだった。そして今シーズンは、何故かオーストリアで開幕戦を迎えたのだけど、これにはかなり深い訳があって、今も世界中で感染者が立て続けに増えている新型コロナウイルスまたの名を「COVID-19」の大規模なパンデミックとかの影響をモロに喰らって俺が住んでるイギリスもロックダウンを行っており身動きが取れず、一旦イギリスにステイする事にした。幸いにも昨シーズンの後半戦にカンポスレーシングからF2に参戦していて、今年はカーリンからフルエントリーしている佐藤晴南選手と住んでる所が一緒（アツテンポローで共同生活）だからお互いのチームの雰囲気とかの情報交換とか出来たりしたのがとても助かった。何故かって？すぐに戦略が練れるからだよ。そしてCOVID-19が一段落して迎えたF2開幕戦は、なんとF1同時開催という例年とは少し違う開幕戦となったが、今年のF2前半戦は、コロナ対策の一環として無観客で開催する事が発表されたが、

もしかしたらその都度変更するという事だ。でもフリー走行からいきなり波乱の幕開けとなった。まずは今シーズン、トライデントからフル参戦するルーキーの坂口万璃音選手のマシンがコースアウトしてマシンがストップしてしまいイエロー。そして俺はと言うと、その間走り終えてガレージに居てギャリーとセッティングを一緒に考えていた。そして足回りを少しだけ柔らかくして扱いやすく仕上がったマシンを更に扱いやすくした。イエローが解除されて、再びマシンに乗り込みコースイン。しかしこれは偶然なのか、なんかの縁があつてこのチームに巡り会えたのかは分からないけど、最後に走るチームが天国に居る誠真と一緒のチームになるとはね。しかもファーストドライバーという同じ立場で。だからこのチームに巡り会えたのかもしれない。そしてタイヤに熱を入れてアタック開始。この時タイヤはソフトタイヤ。柔らかいからすぐに熱が入ってくれてとても助かった。そしてタイムは全体トップタイムでフリー走行を終えた。そして予選では決勝用のタイヤチョイスで挑む事にした。タイヤはハードタイヤでセッティングはあのまま。そして予選開始の合図と共にコースイン。1周熱入れて次の周からは全開走行。そして結果は、開幕早々俺のポールポジションとなった。そしてチームメイトはまさかのフェラーリ育成のアイロツト……。マジで嫌な予感しかない。フリーチャーレースでは、前半はハードタイヤで相手との差をつけて十分にマージンを稼いでピットに入りソフトタイヤに交換して後半を引っ張ると言う作戦

が見事当たり、ファイヤーレースは俺の優勝。続くスプリントレースでは、ファイヤーレース以上に荒れたレースになった。まずはカーリンからレッドブルジュニアとホンダ支援の元、今季F2にレギュラー参戦を開始した後輩の晴南のマシンが、ドラシャが折れて駆動を失い、最初の1コーナー後のストレートでストップ。これでイエローフラッグ。てか、もうその前から荒れており、まずスタートして1コーナーの進入時にマシンが相手に当たってしまい、ダメージを心配したけど大したダメージは無くてもよかった。そしてDRSゾーンに入りDRSを作動させ相手を豪快にオーバーテイク。これでトップになり結果は俺の2連勝でF2開幕戦は幕を閉じた。

## Round 2 2連戦（シユタイアーマルクGP）

前回ラウンドは、俺の完全制覇で終わったけど、今回は史上初の2連戦。だけどF1 Aのお約束上「同じラウンドでも2回連続の場合名前を変えてやらなければいけない。」というお約束があり、この場合オーストリアGPではなくこのサーキットがあるシユタイアーマルク州という地名をGP名にするという事で「シユタイアーマルクGP」という名前になっている。そもそもこれはF1が「1国1GP」を掲げてる為でもあり、日本も例外ではなかった。かつて日本では、1994年と95年に鈴鹿と岡山（旧TIサーキット英田）でF1がやっており、その際TIサーキット英田の場合、日本GPを名乗れなかった為「パシフィックGP」として開催した事がある。確か94年のパシフィックGPはアイルトン・セナが日本で走った最後のレースだったけど、結果はフェラーリから出てたニコラ・ラリーニに撃墜されて終わってたような。でもコースレコードでもある1分10秒は未だに破られておらず、彼がいかに凄いだらいバーかを物語っている。話を戻すと、そんな2連戦でも心配されたのがドライバーの体力面であるが、実はF2を戦い抜いてるドライバーはF1ドライバー並のトレーニングをしてる為、体力面は問題ないけど2連戦の場合、次の週の為、休まる暇がなくて空き時間で休息を取

るといのが今回の流れかな。まあ寝るくらいしかないけどね（笑）。実はこのレースの前の週でアメリカで罪なき黒人が白人警官によって命を奪われるという痛たましい事件が起きその1件でアメリカの各州、果ては全世界を巻き込んだ大規模な抗議デモに発展した。そしてその波はモータースポーツ界にも及びF1、F3でもレース前に片膝を着いて抗議するというのを行うというのだが俺も差別を嫌ってる人間でありこの醜い差別に抗議する為進んで賛同したのだ。そして全マシんに「END Racism（差別はここで終わらせてやる）」というリバリーと「We Race us One（俺達はレースでひとつに）」というリバリーを貼ることにしたのだ。レース前に、全ドライバーで人種差別に抗議するという意味で片膝を着いて抗議の意を示した。予選は1桁台と安定のポジションとなった。2連戦だからセッティングも変える必要無いからこの点は助かった。そしてフィーチャーレースではロケットスタートが功を奏して一気にトップになりそこからジリジリ差をつけて行きピットも完璧に決まりもう完全に俺のペースでレースを進めていき、結果は俺の3連勝。スプリントレースでは随所で激しい順位争いが見られており俺もトップを死守する為にひたすら後方をブロックしまくっており果てはDRSゾーンでDRS作動条件でもある1秒以内を大きく引き離し相手のDRSを無効にしてトップを死守して結果は前回と変わらず俺の4連勝となりポイントも80ポイントでランキングトップをキープしたまま第3戦ハンガリーを迎

えるのであった。



## Round 3 ポデイウムラツシユ（ハンガリーGP）

開幕戦から完全に波に乗った状態で迎えた第3戦ハンガリーGP。このペースをどこまでキープ出来るかも今後を左右する大きな「鍵」となってくる。さあ、あと今シーズンも残す所後9戦18レース。まだ前半戦だけどこの前半戦でどれだけポイントを取らねばならないかを維持出来るかも鍵となってくる。今シーズンの場合、例年とは少し違うシーズンの為1レースでもポイントを逃すと後が大変な事になる為1ポイントでも多く欲しい。そして迎えたフリー走行。路面温度は高めの為すぐタイヤに熱が入ってくれる為安易にタイムを上げることが出来る。セッティングもオールラウンドのバランス重視のセッティングにした。実は俺の場合、フリー走行だろうとお構い無しに決勝用のセッティングを施して走る為予選とかそんなに苦労しない。そしてタイヤは最初はソフトタイヤで走る事にした。そしてフリー走行開始の合図と共にコースイン。コースインする度に思うのが毎回ギャリーが扱いやすいセッティングを施してくれるから、フリー走行とかでも、前みたいに暴れるマシンを自分の腕でねじ伏せながら走るなんて言うのが無くなり俺の精神的負担を軽減させてくれていたからその点はものすごく感謝してる。でもこれもお互いの息が合っていないと出来ないことなん

だと思う。そしてフリー走行はまさかの赤旗で振り出しに戻った。F2はすぐ何かあるとフリー走行は赤旗にしたがるんだから。まあその分、俺が休まる余裕が生まれたのは有難い話だけど。そして赤旗が解除され再びマシンに乗り込みメカニックの合図と共にコースイン。そして全開走行をしていてメカさんがボードを出して俺にみせたけど俺は遅れをとっていると勘違いしたのか何なのかは知らないけどもつと行けるはずだと思いつとペースを上げて走っていたら全体トップタイムでフリー走行を終えた。そして予選ではチームメイトとのタイムアタック合戦と化した。俺がトップになったその次の瞬間チームメイトがトップになると言うのを繰り返しており、この白熱した戦いにみんな大盛り上がり。そして予選が終わりチェッカーが振られた瞬間に俺がゴールラインに入り、タイムはチームメイトに1000分の6秒の差で逆転ポールポジションを獲得した。そして貴重な4ポイントもゲットして最高の流れで迎えたフィチャーレース。スタート前チーム内で紳士協定を結んだ。その協定の内容は「スタートしてから最初の1コーナーでドメを刺さない」という事だった。俺はアイツと戦っている時いつも当たらないかヒヤヒヤしながら走ってるからこの協定に関しては是非とも最終戦まで締結していききたい所だ。そしてシグナルがブラックアウトしてスタート。スタートは完璧だったけど何かがおかしかった。ミラーを見て確認したらチームメイトが微動だにしておらずガレージに引っ込められていた。多分クラッシュの温度上がっ

て張り付いてエンストしたな。幸いにも突っ込んでくる奴がいなかっただけ良かった。そしてピット作業も完璧に決まり、結果は俺の5連勝。ねえ誰か早く俺を止めないと大変な事になるよ。そしてスプリントレースでは遂に俺の連勝記録を5でストップさせる奴が現れた。それは俺と同期の中国人ドライバー李一飛（リー・イーフェイ）であった。彼はルーキーイヤーからかなり頑張っており、今シーズン在籍してるチームの国籍が日本の為必死に日本語を習得しながらも走っているが速さは一級品。そんな彼が遂に俺の連勝記録を5でストップさせた。そしてシグナルがブラックアウトしてスタート。この時俺はスタートをミスってホイールスピンスさせてしまいそこから一気に一位まで陥落。だけど見せ場はここからだった。俺は怒涛のオーバーテイクショーを展開して気付けばアイツの後ろ。もう勝つ為に必死だったけど、アイツも負けじと必死にブロックして俺を勝たせまいと必死だった。そしてチェッカーが振られる頃には俺のタイヤがもう完全に消耗しきっており惜しくも2位でゴールしたけどフィニッシュ後俺はすかさず一飛（イーフェイ）の所に行き優勝おめでとうと握手とハグを交わした。それにしても昨シーズンからこのF2に参入して来た「チームハヤテ・クリプトタワー・レーシング」だけど今シーズンも頑張っており昨シーズンよりかなり上のリザルトを記録しておりかなり進化したのがわかる。最初の間はもう一飛（イーフェイ）自身もどうチームを引っ張って行けばいいかかなり悩んでてその都度俺が相談に乗ってやって解

決策を編み出しては採り入れるというのがあのチームの最初のシーズンだったけど2年目となった今シーズンはかなり成長しておりもう俺の連勝をストップさせるまでに成長していたから悔れない。だけど黒地にパープルのストライプは映えるな。次もオーストリア同様2連戦イギリスGP。

## Round 4 イギリス2連戦の1戦目(イギリスGP)

今回は遂に俺の連勝記録を5でストップさせるドライバーが現れポイントランキング上でも前半戦ながらかなり大荒れになった中舞台は俺達のホームコースシルバーストーンで2連戦の1戦目を迎えた。そしてそれと同時に今シーズンの残りのラウンドが発表された。まず第6戦はスペインカタロニア、第7戦はイタリアモンツァ・サーキット、第8戦はF1、F2、F3初開催となるムジェロ、第9戦はベルギースパ・フランコルシヤン、第10戦はロシアソチオートドローム、第11戦、最終戦はバーレーン2連戦に決定した。もうここまで来るとFIA側が意地でもF2を成立させようと必死に考えているのが分かる。話を戻すと、ホームコースで迎えたイギリスGPだけど、ここに来て以前俺が言った「嫌な予感」がまさかここで的中するとは俺も考えてなかった。そしてこれを機に遂に俺の怒りも臨界点に達するのであった。実は昨シーズンのスランプ中、俺は幾度となくチームメイト(マゼピン)との同士討ち紛いな事(しかも仕掛けるのは毎回毎回チームメイト)をやらかしており俺も最初のうちはこういうこともあるから仕方ないと思いつながら見過ごしていたが流石にアイロツトと一緒に走って走ってみると流石に荒々し過ぎるので黙って見過ごす訳には行かない。ここで

俺が言わないと流石に他のドライバールの生命にも危険が及びかねないからだ。いや、変に言っても意味ないから最強のおまじないを俺は知っている。そのおまじないというのは俺が2011年シーズンにチーム内の混乱等によるご乱心のあまり色々やらかった際チームのトップから「次やらかしたら、来季のシートは無いと思った方が良いでしょう。」というおまじないを吹き込まれてからは色々改善して行き何とか首の皮一枚繋げて来季のシートを確保したという過去があるからだ。そして迎えたフリー走行。セツティングはオールラウンダータイプに足を少し柔らかくしてとにかく走りやすいセツティングを施した。そしてセツション開始の合図と共にコースイン。でも事前に聞いた情報によると路面温度は低く天候も曇りで気温も少々低めと流石にいきなり全開走行すると「全開走行」が最悪の場合「全壊走行」と化すから慎重に行かないといけない。何故かと言うとF2の場合一応マシンにも保険が利いてるがその保険はあくまでもフロントセクション及び後ろの足回りとかそこから辺にしか適応されておらず、もしエンジンとラブル以外の原因でおじやんにした場合は自腹切つてどうにかしろというのがF2のマシン保険制度だけどいい加減これどうにかした方がいと思う。だって中にはかなりお財布がカツカツなドライバーも居ることだし。話を戻すと、路面温度とか低い為かなり慎重に走っていき、そしてアタック開始。結果は慎重に走ったのも関わらずトップと幸先のいいスタートができた。予選ではフリー走行とは裏腹に遅いトラ

フィックに引っかかるのは俺のラインを邪魔する奴はいるはという最悪の状況になり結果はアイロットの左側となる7番手。そして迎えたフィーチャーレース。スタートは良かったものの少し出遅れてアイロットの後ろ。ピットも上手く行き、取り敢えず表彰台まで頑張ろうと走ってる最中ストレート上で何故かアイロットがマシンを左によせ接触。俺は1度無線で「誰かに当てられたけどまさかアイロットじゃないよね?」と確認したら、返事は「当たったのはアイロットだよ。だけどお前から当たった訳では無いから安心しろ。お前には非は無いということだ。ノーペナルティだ。」その無線を聞いた時俺は「分かった。後で自分からキツク言っとくから。」とだけ返してマシンを降りた。そして案の定チームメイトには危険走行をしたとして5秒のタイムペナルティ及びスプリントレースでの5グリッド降格処分が下された。そしてガレージにアイロットが帰ってきて俺は開口一番「お前、自分が何をやったか覚えてるよね? 忘れたは抜きだからな。」と言うとチームメイトは「確かお前に当ててしまつてペナルティ喰らつた」と言う俺はありつたけの怒りをチームメイトにぶちまけた。「お前は他のドライバの命をなんだと思つてる!! お前はその危険性も知らずにこの世界に足を踏み入れたのか!! お前は知らんだろうけど俺は2年前のあの一件以降命の重さをよく理解し直したんだよ!! よく考えて走れ!! バカが!!」とかなりキツク言つたから次はやらかさんだろうよ。そしてスプリントレースではそんなアイロットもあの一言が効いたのかかなり慎重に

走って無事完走。俺は優勝という結果になった。でもあそこまで言わないとマジで他のドライバーの命を奪いかねないからキツク言っておいて正解だった。もう次こそは同士討ちはありません様に。



## Round 5 2連戦の2戦目（イギリスGP）

前は、ホームラウンドで最悪とも言える同士討ちをやらかしてしまい今回ばかりは何も無い様に祈りながら迎えた2回目のイギリスGP。今の俺に出来ることは、とにかく気持ちを入れ替えて走る事。それだけしか出来ない。いつまでも過去のことを引っ張っていては、今やつてる事に集中出来ない。そして俺はシルバーストーンに到着したらずは深く深呼吸して気持ちを入れ替えた。こうでもしないと何故か落ち着かない。しかし、シーズンも残す所あと7戦となるとホントに油断が出来ない。でも今の状況を見てもタイトル獲得はほぼ確実な物となってるけど実際どうなるかなんて蓋を開けてみないと分からない。そんな中迎えたフリー走行。セッティングは前回のラウンドで使ったやつをまんま流用する事にした。2連戦の良い所は前回ラウンドと同じセッティングが使えるという所だ。あとはただ走り込んで感覚を体に叩き込むだけ。そしてセツション開始の合図と共にコースイン。コンデイションは前回と打って変わって雲一つない青空快晴。路面温度も高くタイヤにもすぐに熱が入ってくれる最高の状態だった。そして気付けば全体トップ。だけど俺の場合、実はそんなに走ってない。皆から見ると、ただ体力を消費するのを嫌っているからとか実はそんなに走りたく

ないからとか思われがちだが実はこの回答は全てNO。実は何故少ない周回数で全体トップタイムを出すかと言うと俺の場合短期決戦型の人間だからだよ。そしてガレージに戻ってきてマシンを降りて、あとの時間はチームメイトが変な事しかしてないかガレージのモニター越しから監視していた。実は俺とチームメイトは、走り方が違い、俺はマシンの性能を最大限に引き出す走り方をするがチームメイトの場合全体的にムラがあるがタイヤマネジメントに少し長けた走り方をする。そしてチームメイトが戻って来ると俺は開口一番「俺の走り方を真似してみろ。そうすれば少しはタイムが上がるはずだ。」とアドバイスをした。迎えた予選では少しスタンスを変えてみた。まずチームメイトを先行させその後に俺がコースインをするというやり方だ。チームメイトも俺が昨日教えたアドバイスをちゃんと覚えていたらしくかなり攻めた走りをしてトップに躍り出るが、俺の方が1枚上手。すぐにタイムを塗り替えトップに。結果は俺がポールポジション、チームメイトが4番手となった。そして迎えたフィーチャーレース。スタートは俺がロケットスタートをかましてポールシヨットを奪った。そしてレースも中盤に入った頃にピットイン。ピット作業も完璧に決まり俺のポールのウインとなった。チームメイトもかなり大健闘して3位表彰台とファステストラップを叩き出してボーナスポイントを獲得した。いやあ2戦ぶりの優勝も良いものだ。2位には前回俺の連勝記録を5でストップさせた李一飛(リー・イーフェイ)が入った。続

くスプリントレースでは俺と一飛（イーフェイ）の熾烈なトップ争いに観客やチームも大盛り上がり。もう各コーナー毎にトップが入れ替わりもうどっちが勝っても可笑しくない状況だった。そしてこのバトルはゴールラインまで続きフィニッシュした際はどっちがゴールしたか肉眼では分からなかった為スロー映像判定に持ち込まれた。結果は、一飛（イーフェイ）が0.0001秒早くゴールして優勝、俺は2位に入った。この結果は控え室で2人して映像を食い入るように見ていた。そして結果を知ると2人して握手とハグを交わした。そして次なるラウンドはシーズンの折り返しとなるスペイン

## Round 6 シーズン折り返し (スペインGP)

前は、ダブル表彰台そしてスプリントレースでの超接近戦を演じたりとF2に復帰してから4シーズン経つけどこれまで経験した事ないほど波に乗ってる状態で迎えた、スペイン、カタロニアGP。でもこの状態はどこか懐かしい感じもした。そう、これは今から7年前にカリーンからGP3 (現FIA-F3) にエントリーしてた時に自分の性格とマシンの性格がかなり一致してて全戦全勝とまで行かなかったけれど大半のラウンドで勝利を挙げこの年の年間王者に輝いた時と全く持って同じ状態なのだ。そしてこのラウンドをどうクリアするかで後半戦の流れも変わってくる。そんな中迎えたフリー走行。セッティングはミディアムダウンフォースというこれまた中途半端なセッティングを施してるがこれをギャリヤーがやると何故か中途半端ではなく素晴らしい感じになる。そしてセッション開始の合図と共にコースイン。俺は走っていた際高速カーブセクションでスピン。恐らくダウンフォースが思っていたより不足していたのだろう。取り敢えずコースには復帰出来たので復帰してそのままガレージに直行して無線で「ちよつとギャリヤーを呼んでくれ」と言いギャリヤーが来て「何があった？」と聞かれて俺は「高速カーブセクションでダウンフォースが不足してスピンしたから少しだ

けでいいからダウンフォースを増やして欲しい。今のままでも十分扱いやすいけど少しダウンフォースが不足してるように感じるんだ。」と話して少しだけダウンフォースを増やして再度コースイン。そして問題だった高速カーブセクションも難なくクリアして全体トップタイムでフリー走行を終えた。予選では俺もそうだけどメーカー育成ドライバーの全面競争に発展して行つた。まずはホンダ育成ドライバーの俺がトップタイムを出すと次にFDA（フェラーリドライバーズアカデミー）のチームメイトがそれを塗り替え、その次にレッドブルジュニアのドライバーが塗り替えるといった非常にカオスな展開になっていきラスト5分になった所で再び俺がコースイン。そして結果は俺がポールポジションを獲得してチームメイトは2番手とヴィルトウオーシの1、2となつたが嫌な事が1つだけある。それはあいつが1コーナーで俺にトドメを刺さなにかだ。でも紳士協定を締結してるから大丈夫だろう。そして迎えたファイナルレース。まさかここで番狂わせが起きるとは誰も考えちやいなだろう。そしてシグナルがブラックアウト。スタートは完璧に決まつた。そして1コーナーに突入した際に、何とアウトからトライデントの坂口選手が大外刈りで2番手に上がってきた。いや正直マジでビビつた。そしてピット作業も完璧に決まり余裕もって迎えたはずのファイナルラップ。番狂わせはこの時に起きた。とにかく優勝したいと必死にブロックしていたが最終コーナーで隙を突かれてしまい、結果は、坂口選手が初優勝、俺は2位に

入り日本人ドライバーのワンツースリーフィニッシュとなった。チームメイトもかなり頑張って何とか6位でフィニッシュ。続くスプリントレースではフィーチャーレースのお返しで俺と坂口選手の一騎討ちを演じ、結果は俺が優勝、坂口選手が2位とフィーチャーレースと逆の結果になった。ちなみに晴南も大健闘の3位表彰台を獲得した。ちなみにこの時に、ゲラエルがクラッシュして、胸骨を折るといふ大怪我を負ったとの事だ。

## Round 7 Shout &amp; Loud (ベルギーGP)

前回の番狂わせから13日後に迎えたベルギーGP。そしてあの日からもう2年が経とうとしていた。俺はラデイオンに着くと花を手向け、手を合わせて「今年も来たぜ。いつもあの世から見守ってくれてありがとう。今年こそ絶対王者獲得するから背中を押してくれ。」と天国に居る誠真に伝えた。そしてこのベルギーGPは本場に特別なレースだと感じている。何故なら俺と2018年シーズンから戦ってるドライバー全員が誠真の死を乗り越えて戦ってるからだ。そして俺のマシンには、あの日以降、あいつの名前のイニシャルとカーナンバー、ヘルメットのリバーリをマシンに貼り付けてる。それくらい誠真の死は、俺に影響してるのだ。俺はあの日以降、軽度のPTSDと軽度のサイバーズギルトになってるが、今も克服しようと頑張ってる真っ最中だ。でも最初の頃よりはマシになっている。最初の頃は、救急車のサイレン音を聞いただけで軽い発作じみた呼吸が起きたりとフラッシュバックを起こしていたが、最近はそんな事もあまり起きなくなっている。そんな精神面とも向き合いながらシーズンを戦ってる。そして迎えたフリー走行。セッティングはローダウンフォースで行く事にした。天候も全日程晴れ。そしてセッション開始の合図と共にコースイン。そしてかなり走り込

んで気付けば全体トップ。俺はそんな事気にもせず走っていると無線で「この周で戻って来い。もう十分走っただろ。」と言われこの周でガレージに戻った。そしていつも通りギャリーとセッティングについて良く話し合う。ギャリーからは「ローダウンフォースとはいえダウンフォースを若干増やしてある。」と言われると俺は「若干という5〜10%くらいかい？」と聞きギャリーは「それくらいかな。増加させたのは。」と言いは「ローダウンフォースでも少しだけダウンフォースがあるとかかなり違うんだよな。その、5〜10%増やしただけでも安定性が違ってくる。でも感覚で言う俺が一番最初に走ったプレマの時とかなり類似してるんだ。」と俺が言うギャリーからかなり衝撃的な一言が出てきた。「お前は知らんだらうけど、実はお前がデビューしたプレマでお前の担当誰だったと思う？実は俺だよ。」というかなり衝撃的事実を知り俺は「嘘でしょ!?!だからあの時マシンが扱いやすい性格に仕上がってたのか。だからこんなにも息ピッタリなのか。」と逆に納得してしまった。そんな驚きもあったフリー走行だった。そして迎えた予選。予選では遂に長年極めていた「技」を解禁した。それは「セナ足」と呼ばれる技でその名の通りアイルトン・セナがレースで良く使っていた技で、1秒間にアクセルを踏む回数は6回と言われておりこれまで数多のドライバがこの技を試したが実戦投入はしなかった。そんな技を実はシーズンを通して極めていた。実はトレーニングにもこれを探り入れており、いつ使ってもいいように切り札としてこの



日の為に温存していたのだ。そしてセツション開始の合図と共にコースイン。1周ウォームアップして2周目からアタック開始。そしてこの技を使い誰もが驚愕したスーパードラッグを叩き出した。そして今回から初の試みでドライバーの足元に小型カメラを取り付けて足元の映像も国際映像で流す事になったのだけどもさかその第1号が俺になるとは。そして実況もこのスーパードラッグの際、足元に注目しており、日本で唯一F2を放送しているDAZNも実況が「なあんとセナ足の正当後継者が現れたぞ?! かなり速いタイムで、来ている!! そして今セツションが終了したがどうだ?! ポールポジションだあ!! ポールポジションは九嶋だ!! なんとチームメイトに対して0.6秒差でポールポジション獲得!! セナ足侮るべからず!!」という実況が飛び出す程凄い走りを披露したのだ。実は当初の予定では2年前に導入する予定だったけどまだ未熟な上ミスった際の代償があまりにも大き過ぎて取り返しつかないからという理由で封印していたのだ。そしてチームメイトからは「どうしてそんなに早いタイムが出たのか教えて欲しい。」と言われたが俺は「これに関してはトップシークレットだから教えられない。気になるなら足元の映像を見ることを強く推奨するよ」とだけ返した。そして迎えたファイナルレース。このレース前に皆で天国に居る友に黙祷を捧げる事が決まった。そしてレース前になり1分間の黙祷を捧げた。その間スパは静寂に包まれた。そして黙祷を終えるとスタンディングオベーションが起きた。そしてシグナルがブラックア

ウト。スタートは最高の出来だった。そしてセナ足を使いかなりのハイペースで走りピットイン。スーパーソフトタイヤに替えてピットアウト。そしてチエツカーフラッグが振られフィニッシュ。結果は俺の優勝。スプリントレースでもセナ足を使い、相手に3秒の差をつけて圧勝。俺は、ゴールした時に天高く拳を突き上げて喜びを大爆発させた。やっとスパで勝てた。そして昨年のリベンジが出来た。そんな気持ちでいっぱいだった。表彰台に登壇し、2日連続でスパの地に君が代を響かせた。そして俺達は次なる舞台イタリアモンツァ・サーキットへと向かった。ここまでのポイントランキングは依然として俺がリーダーのまま終盤戦へと突入。遂に念願の世界王者獲得まで目が離せない!!

## Round 8 勝利するよりも大切なこと（イタリアG

P)

前回のスパ・フランコルシャンでの初優勝をしてさらに波に乗った状態で迎えたイタリアGP。もう今の俺は誰にも止められない状態なのだ。そしてチームの士気も最高潮に達していた。そしてモンツァ・サーキットには熱狂的なティフォシが詰めかけているかなと思わせての「無観客」。それにしても静か過ぎて逆に落ち着かなかつた。まあ「このご時世」を考えればこれも致し方ないのだろう。そして迎えたフリー走行。セツティングは前回のスパ仕様様に少しだけ改良を施したやつで走る事にした。そしてセツション開始の合図と共にコースイン。まずは、前回遂に解禁したセナ足を使い走ってみてその後普通のペダルワークで走ってみてどっちが速いのかも試してみる事にした。そして最初にセナ足を使って取り敢えずトップタイムを出してそのまま次の周は普通のペダルワークに切り替えて走ってみたがまあ違和感全開。そしてタイムはさっきのやつに比べてかなりの差があり、セナ足がどれだけ凄いか改めて実感出来た。そして迎えた予選。予選でもセナ足が炸裂。しかしこの技今時のレーシングカーにも通用するのが凄い所である。この技自体アイルトン・セナが当時ドツカンターボそして予選1

540ps決勝1350psという排気量が1.5リッターながらこの途方も無い馬力を叩き出した「バケモン」を正確に早く操る方法は無いかと探って編み出したこのセナ足という技。それが今になって再び実戦で使うとは誰も予想してなかった。まあ電子制御を一切搭載して無いこのマシンにとっては好都合だったのだろう。そして結果は俺のポールポジションとなりさらにプラス4ポイントをゲットした。そして迎えたファイナルレース。このレースは今シーズン最も荒れたんじゃないかと思うレースになった。まずスタートは難なく決まりコーナーも大きな混乱も無く全車クリア。そしてまあ荒れたのはその次の周から。まずチャロウズのルカ・デレトラスが俺をパスする際イン側のグリーンに乗りながらパス。その際俺は「おいおい!!お前どっから抜いてんの!」と驚きを隠せなかったがこんな事スチュワートが黙って見過ごす訳ない。まあ当然ながらトラックリミットオーバーということでもドロップポジションペナルティーとなった。だからもし俺が2位でゴールしても結局言う俺の優勝となる。そしてピット作業も完璧に決まって結果は俺の優勝。そしてスプリントレースでも俺の優勝。そしてポイントランキングは俺がリーダーだけど下位争いがかなり激化しており2位3位共に同点というこれまた激しさを増している。そしてシーズンも最終戦へ向かってさらに激しくなっていくのだった。

## Round 9 cool&amp;hard (ムジエロGP)

前はモンツァ・サーキットでのレースだったが、今回は初開催のムジエロサーキットでのレース。このサーキットはMotoGPイタリアラウンドで使われているサーキットで人気投票1位をよく獲得している所であり特徴的なのは同じセクションが2つ以上なく全てのセクションが程よくミックスされているのが特徴。そんなサーキットで迎えた第9戦トスカーナGP。そしてシーズンも残す所あと3戦と本当にあっという間に終わってしまう。だけどその3戦でどれだけポイントを稼げるかでも随分話が変わってくる。そして迎えたフリー走行。天候は全日程晴れ。気温も低くなく高くなくいい感じの気温であり路面温度も高めと非常にデータ収集にはもってこいのコンディションだった。そしてセッティングはオールラウンダータイプのダウンフォースを少しだけ削るといふこれまた奇妙なセッティングを施した。そしてセッション開始の合図と共にコースイン。とにかく走りまくった。それもそのはず。初めて走るサーキットをたった2〜3周走っただけでは感覚は身につかないし得られるデータも本当に限られた物になってしまい無意味になってしまう。だから走り込んで感覚を身につけさせるのだ。もしかしたらこの1回限りの開催になるかもしれないか

ら尚更走る。そして時間目一杯走ってタイムは全体トップ。決勝に望みを繋げることが出来た。そして予選では、どん底からの奇跡が起きた。実は予選前のウォームアップランの最中に原因不明のメカニカルトラブルが発生してしまい、そのトラブルシューティングにかなり時間を使っておりのままだとノータイムの窮地に立たされており今もメカさんが総動員で俺のマシンのトラブルシューティングを行っている。そして予選終了まであと3分となった所で俺のマシンは元通りになりそして俺が乗り込むと監督から無線で「残り3分しかないけどどうする?このままマシンを降りて降りつけつからスタートするかそれとも走ってピリよりマシンな所でスタートするかはお前の判断に委ねるよ。」と言われ俺は「だったらー発で決めるしかないー」と言いコースイン。そして1分50秒でアクセル全開でウォームアップを行いアタック開始。もうセナ足を体得している俺は敵無しの状態だった。そしてろくに温まってないタイヤで走るというまさにデンジャラスな事もやってのけた。そしてチームメイトよりも高い回転数でギアを上げたり下げたりと何としても予選だけは通過したかった。そして日本の実況も流星に驚きを隠せず「なっ…なんと!!九嶋が凄いい走り方をしている!!残り時間はそんなに無いの!!か…彼は一体何者なんだあ?!ポールポジションのタイムよりも早いタイムで各セクション通過をしている!!」と完全に語彙力を失っている状態だった。そしてタイムマーがゼロになったと同タイミングで俺もフィニッシュラインを通過して結果

は超大逆転ポールポジションとなりこれをガレージで見ていたメカさん達は泣く人もいれば抱き合つて喜ぶ人もいた。そして何より嬉しいのが自分なのかもしれない。そしてガレージに戻ると皆して大喜びした。そして俺は「自分も、正直もうダメだと思つてたけど皆の努力を無駄にしたくはなかった。」と素直な気持ちを言つた。そしてそんな奇跡が起きた予選から一夜空けて迎えたファイナルレース。俺は念願のタイトルを獲得する為の条件を満たさなければいけない。その条件というのが最終戦スプリントレースで優勝するかランキング2位のドライバーがリタイヤするかというかなりハードな条件である。そしてこのレースでとにかくポイントを稼いでおきたいというのが狙いだ。そしてマシンをウォームアップさせてグリッドに着き、シグナルがブラックアウト。スタートは完璧に決まった。そして1コーナーも俺がブロックして主導権を完全に握つた状態でレースは進行していった。そしてピットインの時も作業が完璧に決まりそのままトップを守つた状態でコースに復帰した。でも俺は冷静に落ち着いて走つていた。そしてチェッカーフラッグが振られフィニッシュ。結果は俺のポールのトウウィン。でも実はラスト数周は無線機がイカれておりチームがだすボードで状況を理解していた。そしてゴールしてパルクフェルメにマシンを止めて降りると俺は喜びを大爆発させた。そしてスプリントレースでも完全に俺の一人旅となり2レース共に俺が優勝という結果になった。そしてガレージに戻るとメカさん達は大喜びで俺を

迎えてくれた。そして俺は「この調子で最終戦まで頑張ろう!!」と言った。そんな奇跡だらけの今回のラウンドだったが次でシーズンも残り2戦となったがランキングを見ると2位との差がかなり詰まってきたおり何としてもリタイヤやノーポイントは避けたい。そしてホンダの方ではとある計画が着々と進んでいたのだ。



## Round 10 Overture (ロシアGP)

前は、予選終了間際までマシンのトラブルシューティングをしてからのぶつつけ本番とも言える1発だけの予選で奇跡の超大逆転ポールポジションを獲得してからの2レース共に俺が優勝という結果で終わって迎えた次なるラウンドはロシア、ソチアウトドローモ。このサーキットは昨シーズンスランプに苛まれていた俺がそのスランプから抜け出せる事が出来て覚醒した所でもある。しかし俺の場合、相性良い所とそうじゃない所がハッキリしている。でも俺の場合は高速サーキットが得意である為、下手に低速域を常用域とするサーキットは苦手なのだ。そしてロシアはとにかく寒い!!モスクワよりも寒いってどういう事よ!?!とにかく温まりたくてもうマシンの後方のマフラー近くに居てメカさんにスターターセルを持ってこさせて俺のマシンのリアセクションにこれをぶっ刺す穴があるから棒を刺してセルを回してエンジンをかけてもらい暖気ついでに暖房みたいに使って暖をとっていた。そして暖気が済みセッティングを考えていて、出た結論はオールラウンドタータイプで行く事にした。最近このセッティングに頼ってばかりだな。よくよく考えれば。でも変なセッティングするよりはマシだと思おう。そしてマシンに乗り込みエンジンをもう一度かけてもらってもう走る準備は万端。

そしてタイヤはソフト。タイヤがはめられ、ジャッキが降ろされた。そしてバイザーを降ろし、セツション開始の合図と共にギアを1速に入れてコースイン。流石に1周じやとてもしゃないけど熱が入りにくい為敢えて多めに走る事にしていた。2周ウオームアップしてからアタック開始。もう走るだけ走った。そして全体トップタイムでフリー走行を終えた。そして迎えた予選。予選では、もうかなり力オスな展開となった。トップがおぞましい勢いで変わっており俺もこの争いに加勢する事にした。そして俺が加わった事によりさらにカオスな展開となったがそのカオスな争いを制したのはやはり俺であった。もうセナ足を身につけたからには「それなり」の走り方をしなければいけないかった。そして俺のタイムを越えようと皆して挑んだが誰一人として越える者が現れなかった為俺のポールポジション獲得となった。そして迎えたフリーチャールース。もうタイムトルを獲得する為には重要なレースとなった。シグナルがブラックアウト。スタートはチームメイトよりも0.1秒俺が早かった。実は俺の場合は自分で「ローンチコントロール」というスタートシステムを完全とまで行かないけど擬似的に再現しているからスタートがスムーズなのだ。まあやり方を説明するとまず1速にギアを入れたままハンドクラッチをホールドしてアクセル開度を大体30〜35%位にしてそのままクラッチを離してスタートするというやり方だけ上手く行けば早いけど失敗するとエンストというデカいリスクも孕んでいる。だけどこれはチームメイ

トから聞かれても俺は何一つこれに関しては何も口を開かないようにしている。だって俺が勝つ為に自ら得た技なのだからそれを簡単に口に出して相手に教えるとか馬鹿な事はしない。そしてレースも半分を消化した所でピットイン。ピット作業も完璧に決まりトップのままコースに復帰。そしてあとは完全に俺の一人旅となりそのまま優勝。そしてスプリントレースはまさかの展開となった。それは5周目に起きた。上位争いをしてきたチャロウズのルカ・デレトラズとカンポスのニック・エイトキンが接触、2台とも壁に突っ込みクラッシュしたがカンポスのエイトキンは壁と壁の間にマシンがめり込む大クラッシュが起こり辺りが騒然となった。何故なら2年前のあの一件があったからだ。でも幸い2人に大した怪我も無ければ命にも別状無しと聞いてホッとしたけど、チャロウズのマシンはかなり壊れており残念ながら廃車となった。そしてその事故の影響で20分の赤旗中断となったがあまりにも凄い事故だった為再開の目処が立たずそのままレース終了となり結果は俺の優勝となった。そして遂にバーレーンでの最終2連戦を迎えるのであった。そしてホンダ公式プレスリリースで俺がスクーデリア・アルファタウリ・ホンダレーシングから来季のFIA—F1世界選手権にフル参戦する事が発表された。遂に子供の頃からの夢が叶ったのだ。そして次のバーレーンでの2連戦は世界王者獲得の為に重要な1戦なのだが俺は最終戦で決めたいと思っている。

## Round 11 Go my Road (バーレーンGP)

今回はスプリントレースで2台が絡む大クラッシュが起きて赤旗中断そしてそのままレース終了という俺にとってはあまり嬉しくない結果になったがこのシーズンも遂にこの最終2連戦でおしまいとなる。これまで数多の苦楽を共にした仲間とも本当の別れを告げる時が刻々と迫って来た。二度と会わない奴も居れば今後またF1で一緒になる奴もいる。そんな事もF2の最終戦直前ラウンドの醍醐味でもある。本当にここまで来るのに決して一筋縄では行かなかったし、自分でも1度は諦めようと思っていたけど今ここから逃げたら全てが無駄になると迷った時もあった。けど、この2連戦で全てが決まってしまう。だったらここで全てを決めるしかない!!こんな事言えるのも俺がチームの皆をとて信頼してるからだ。そして迎えたフリー走行。気温は前回のロシアとは打って変わって暑いとかく暑い。コースもこのラウンドはインナーコースと呼ばれる低速型のコース。そして路面温度もとにかく高い。これソフトタイヤとかで行くはいいいけどブリスタースター起こさないか心配になってくる。※ブリスタースターとは人と言う水ぶくれの事。そしてセッティングはこれまたお馴染みのオールラウン

ダータイプ。そしてセッション開始の合図と共にコースイン。そのままウオームアップと行きたいのだけどそもそも路面温度が高いからすぐ熱が入る為ウオームアップする必要が無い。そしてアタックラインを通過してアタック開始。もうここまで来ると自分との戦いになってくる。そして黙々と周回を重ねている間に気付けばトップに。そしてピットに戻ってマシンをガレージに戻し俺がマシンから降りてタイヤを確認した所懸念されていたプリスターは起きていなかったが流石にもうこの暑さを走り込もうなんて言う気力が湧かなかった為もうメット類全部脱いでレーシングスーツだけになってガレージで珍しくくつろいでいた。普段俺は常に気を張りすぎてる為、くつろぐ余裕は無いと思いつながら行動してたからせめて今日位はくつろぎたかったのだ。そんな珍しい一面も見せてフリー走行は終わった。そして迎えた予選。予選では全チーム極限の戦いを披露した。そしてセッション開始の合図が鳴り響くと同時に先陣を切つてコースに飛び出したのが今年のF2に参戦してる数少ない女性ドライバーの1人でもあり俺の元チームメイトの宮藤星奈(きらな)選手だった。このドライバーはかなり実力派のドライバーなのだが、何故かいつもマシンと結果に報われておらず相当苦労してるドライバーである。俺と同じ点をあげるとしたら、こういった自分が辛い事分かかっていても笑顔を絶やさない所と、レースの時は冷静にそして激しい走り方をする所、普段は明るくてはっちゃけてる所かな。でも彼女、今シーズン俺と一緒にいきなり

覚醒して、現在ランキング5位にいるけど、どうやら今季に移籍したチームハヤテのマシンと自分の性格が思った以上に合致しているらしく、甘く見ると大変な事になりそう。彼女だつてスーパーライセンスポイント40点確保してF1に行こうとしているのだから。そんな彼女がとんでもないタイムを叩き出してそれを更新しようと思つて皆してコースイン。俺もその中の内の1人だ。そして予選もポール争いがヒートアップ。俺はもう十八番となつてるセナ足を巧みに駆使して彼女のタイムを更新しようと思つていた。そして最後の最後これで彼女自身初のポールポジションと思つたその瞬間周囲の人々がかなりざわつき始めたそれは最後の最後で俺が彼女のタイムを更新してポールポジションを奪取したからだ。そして予選終了後俺は真つ先彼女の元へ行き「ポールポジション奪つちやつてごめん。」と言つて彼女は「明日はお返しするから待つてなさいよね!!私だつてその気になればあんたなんてイチコロなんだから!!」と言われて俺は「望むところだよ!!全力でかかつて来な!!」という会話を交わして予選は終わった。そして迎えたフィーチャーレース。まさか昨日彼女が言った事が現実になるとはね。俺自身思つてもいかなかった。そしてシグナルがブラックアウト。スタートは完璧に決まりそのままコーナーも制してあとは俺のペースで物事を進めていけばいいかと思ひながら走つていて迎えたピットイン。作業も完璧に決まりそのまま俺の勝利かと思つたらそうでは無かつた。実はラスト3周俺はとにかく彼女の猛攻を防

ぐべく必死にブロックしていたがファイナルラップの最終コーナーで隙を作ってしまった。その隙を突かれて彼女がトップに。これには俺も最後まで食らいついたけど虚しく結果は宮藤選手自身初となるキャリア初優勝となり俺は2位となった。マシンをポディウムエリアに止めてマシンから降りると彼女の口から開口一番「どうだ!!私の実力を思い知つたら!!だから甘く見ない方がいいって言ったのよ。」と言われて俺は「君には負けたよ。俺もあそこまで必死に攻めるドライバーは初めて見たよ。いや、隙を作ってしまったというのはまだまだ詰めが甘かった証拠なのかもね。でも次は俺が勝つから。」と返して彼女も「かかって来なさいよね!!今度こそ完全に防いでやるんだから!!」とかなり俺とのバトルを楽しんでくれてるみたいだ。そして迎えたスプリントレースでは遂に俺が真の力を発揮した。スタートは難なくこなして1コーナーは彼女に行かせて後ろで様子を伺って次のコーナーでパス。そしてそのままブロックしてDRSゾーンまで持っていきDRSを使わせて俺を抜かそうとしたけどこれも計画通り。実は昨日のレース後入念に作戦を練っていてちゃんと対策してたのだ。そしてファイナルラップになり俺もいつ抜かれるか気が気じやない状態で危ない中トップでフィニッシュして15ポイントを獲得した。そしてマシンを降りると彼女から「ホントは…アンタをパスして2連勝したかったけど今日はアンタの勝ちね。」と悔しさを全開にしていたが俺は「でも最後まで俺を攻略しようとな必要に頑張ってるのミラーで良く見えて

たよ。偉い偉い!!よく頑張った。本当は君にこの一勝をあげたい。けど結果は結果だからこればかりはどうしようも無いけど君とのバトル中いつ抜かれるか俺はすごいヒヤヒヤしながら走ってたよ。だけど本当の勝者は君だよ。」と彼女に言うとなんか彼女が溢れて思いっきり号泣して俺に抱きついて来て俺は「ヨシヨシ。よく頑張ったね。辛かったよね。苦しかったよね。けどよくここまで頑張ったね。本当に偉いよ。」と、優しく声をかけてやると彼女は「…あ…ありがとう。」と言い観客席や皆からは過去最大級のスタンディングオベーションが贈られた。分かるよ。俺もそういう経験嫌という程してるから。そしてシャンパンパーティでは俺に彼女がよくもやってくれたわねと言わんばかりの勢いで俺に集中放火をした。そしてそんな楽しい事もあった第11戦バーレーンGPは幕を閉じ最終戦を迎えるのであった。



## 最終回 Round12 ソラニカザシタテノヒラ（サ クヒールGP）

前回は、星奈との死闘を繰り広げて大いに沸かせたが、遂に、最終戦サクヒールGP（高速コースである、アウトコース）を迎えた。そして俺は、皆に本当の別れを告げる時が来た。ここに来るまでの間、数多の苦楽を共にして死闘を演じた仲間ともお別れ。そして、F2世界3周旅行もこれでおしまいとなる。気がつけば、あつという間に終わってしまう俺のF2でのレース。本当に時の流れは早いものである。この3年間、本当に「波乱万丈」のシーズンだったけどすごく楽しむことが出来た。俺が乗るマシンには、最終戦限定カラーを纏った仕様になっていた。俺はこのラウンド限定でヘルメットも変えている。ヘルメットは、亡き親友とここまで歩んできたという証と今まで一緒に戦ってくれた事への敬意と感謝を込めて、この日の為だけに、3年間封印してた彼の形見であるメット「シュールベルト・SPICARBON・ブロッサム・カローラMSI」と呼ばれるメットをレッドブルとAraiの許可を得て着ける事にした。マシンのシャークフィンには、もうお約束と化している、自分の名前が漢字で描かれている。このレースを最後に、俺はF2から「卒業」する為、マシンには「see you&go

od luck」と描かれたり、桜の花が描かれたり、カーナンバーは「3+1」になったりと、最終戦限定仕様とは思えない仕様に仕上がった。俺は全ての準備を整え、イヤープラグを耳に着け、耐火マスクを被り、ヘルメットを被り、メガネをかけ、HAN S デバイスをヘルメットに装置して、グローブをはめて、深呼吸してゆっくり、いつも通りにマシンに乗り込んだ。最後のフリー走行開始の合図と共にコースイン。セツティングは高速戦仕様だから、あとは走り込んで、昨日との違いを体に叩き込むだけだった。俺は、今までの事を思い返しながら走っていた。3年前に初めて乗ったプレマや、今の俺を作ってくれた、古巣ARTGP。今思い返せば、本当に思い出尽くしの日々を過ごして来たなどヘルメットの中で思い出しながら走っていた。そして気がつけばトップ。これには俺も超大満足の結果だ。迎えた最後の予選。予選では、超大混戦となり本場に最後の予選を楽しんでいるようにも見えた。俺もメカニックのギャリーの合図でコースイン。そしてアタック開始。もう俺は、このラウンドで年間王者を獲得すると決めているだけに、余計気合いが入っている。そして普段から使用しているセナ足もかなり力が入った「セナ足改」へと進化した。そのセナ足改を使いこなして他を寄せつけないタイムを叩き出してトップに。しかし他のチームは流石にこれを良しとせず皆俺のタイムを更新しようと試みたが、あと1歩が限界でそれ以上は無理だったらしく結果は、俺のポールポジション獲得。そして迎えた、最後のファイナルレース。誠真

の両親がガレージで見守る中、俺は、マシンを思いっきりウエービングさせて、タイヤを温めてグリッドに着き、深呼吸して呼吸を整えて、臨戦態勢に入った。シグナルがブラックアウト。スタートは、かなり完璧に決まり、そのままコーナーも制圧した。ピット作業は、クルーが1人緊張のあまり、手が震えたが、それ以外は完璧に決まり、そのままトップでコースに復帰。そこからはもう俺の一人旅。そのまま俺の優勝となった。チームメイトも3位とダブル表彰台を獲得。そして本当の最後のレースとなった。俺は、このレースで王者獲得が決まる為、自分の全てをかけて戦う覚悟を決めた。もうここには、何も思い残す事は無い。あとは皆に、最高の恩返しをするのみとなった。俺は、ゆっくりとマシンに乗り込み、もう、このマシンのコックピットでは聞き納めになるであろう、メカクロームV634Tに火が灯った。そしてギャリーの「GO!!」という合図でコースイン。マシンをグリッドへと運びセーフティカーラン。俺はマシンを思いっきりウエービングさせてタイヤにかなり熱を入れてもう臨戦態勢に入ったままグリッドに着いた。シグナルがブラックアウト。スタートは、もう神がかつたスタートを決めて、8番手から、一気に2番手にポジションアップ。5周目にして、早くもトップになり、2位の晴南との差をぐんぐん広げていたが、晴南もその差を、かなりのペースで縮めて来た。だけど次の瞬間、焦りからか「ズルッ!!」とダウンフォース

が抜けて、タイヤが滑べり、スピシカけたが、もうミスは一切許されなかった為、意地と気合いと根性で制御して晴南をパスしてトップになった。そして遂に、俺の悲願達成の瞬間が刻一刻と近付いてきた。もう無線でも監督が涙を堪えながら「あと2周で前が王者だ。頑張れえ!!」と言ひ、俺も、もうラスト3周位から涙が溢れだして前が見えなくなっていた。それ程苦勞してきたというが自分でもよく分かる。だけドラスト2周で、俺が恐れていたトラブルが遂に発生してしまった。なんとギアが6速以外全部使えなくなりかけていたのだ。けどあと2周だから、走る以外、手段はなかった。迎えたファイナルラップ。俺はもう、色んな感情がぐちゃぐちゃに混ざりながらマシンを操っていた。実況も、最終コーナーを曲がった時辺りから、「亡き親友、三鷹誠真と二人三脚で世界王者までの道のりを歩んできた今シーズンのF2! さあ! 来たア! 来たア! ホームストレートに戻って来たア! ずっとこの瞬間を皆待ち望んでいたア!! 九嶋輝! 日本人ドライバ―として、アジア人ドライバ―として、FIA-F2世界選手権、初制覇アアア!! 亡き親友、三鷹誠真に捧げる! 念願のFIA-F2世界選手権、年間王者獲得!! おめでどう!!」と、かなり盛り上がっていた。そして己の限界を超えて走ってくれたマシンと共に遂に、チェッカーフラッグ。俺は、誠真が一昨年の開幕戦、バーレーンのスプリントレースで優勝した時と同じポーズをしてゴール。そして、俺が王者獲得というのを知ったのは監督の無線だった。「おめでどうヒカル!! お前が今シーズンのF

IA—F2世界選手権の世界王者だ!!お前は、遂に夢を叶えたんだ!!世界の頂点に立つというデカイ夢を!!」という無線だった。この時、極限状態になつていた俺は、思わず「本当か?嘘とかじゃないよね?」と聞き返してしまつたが、監督が「本当だ!!お前が今シーズンのFIA—F2世界選手権の世界王者だ!!おめでとう!!」と言つて、ようやく理解した俺は、何かがプツンと切れて涙を流しながら「うおおおおおおおおああああああ!!!よっしやああああああ!!!やったああああああ!!!皆!ありがとう!!おいみてるか?!誠真?!お前の分まで皆走つたぞ!!今日は皆が世界王者だぜ!!お前のおかげだよ!!ありがとう!!」とただ泣きながら、マシンから空に手の平をかざしながら握つて作つた拳を突き上げて、喜びを爆発させて叫ぶ事しか出来なかつた。そして俺は、最終ラップの最終コーナー、最後の1秒まで一緒に戦つてくれて力尽きたマシンをピットレーンに止めて、マーシャルに引つ張つてもらい、天高く、自分の名前と、親友の名前と、お互いのカーナンバーが刻まれた、日の丸をなびかせながら、パルクフェルメに、最終コーナーまで一緒に戦いボロボロになつたマシンと共に帰還して、メカさん達が居る所へダイブして、思いっきり喜びを大爆発させた。2位には最後の最後まで、俺を追いかけ回した晴南。3位には、トライデントの非力なマシンで初めて表彰台を獲得した、「苦労人」タルソ・モレノが入つており、初めての表彰台なのか、国歌が流れてる際に、帽子を取る事を知らなかつた為、俺が教えてやると、彼は照れ隠しにとつ

た拳を舐めるといふのが、たちまち大爆笑の渦となった。俺はガレージに戻ると、改めて皆にお礼を言った。「ここまで来るのに、俺一人では到底無理だったけど、皆と一緒だったからこそ、ここまで来れた。本当に皆ありがとう。ダブルタイトルも取れたし、思い残す事はなんも無い。俺がF1に行っても、ちゃんと頑張れよ。アルファタウリのホスピタリティから観てやるからさ。心配すんなよ。そして今まで本当にありがとうございました!!」こう言つて皆は、大きい拍手で俺の巣立ちを送つてくれる中、ガレージを後にした。そして住処だったイギリスにも別れを告げ、またイタリヤだけど、今度はF1エンツアにお引越して、今シーズンのF1A—F2世界王者を手土産に、2021年F1Aフォーミュラー1世界選手権へと臨むのだった。そして、俺が最後の最後まで戦い力尽きたマシンは、ゴールした直後に「ガラガラガラ!!」と完全にギアボックスから力尽きた音がして、マシンがその役目を全うしたかのような感じだったけど、俺はもうそんな事どうでもよかった。マーシャルから、俺と親友の名前とカーナンバーがプリントされた日の丸が手渡しされて、「王者獲得おめでとう!!俺も見ててすごい瞬間に立ち会えたのを誇りに思うよ!!」と声をかけられて、俺も思わず、「ありがとう!!俺も君達が喜ぶ顔が見れて、すごい幸せだよ!!いつも、安全なレース進行をしてくれてありがとう!」と答えて、マーシャルカーに引つ張つて貰つて、クラッチを切り、日の丸を天高くなびかせながら、ウイニングランをしてパルクフェルメまで帰つてきたなんて

言うくらい戦ったのだろう。本当に3年間、数多の苦楽を共にした「バディ」でもあるこのマシンには、もう本当に、感謝の気持ちでいっぱいである。俺のマシンは、ギアボックスだけ交換して、あとはそのままの状態でファクトリーで展示される事になったわけだけど、俺自身ギアボックスを壊したのは、今回のレース込みでたった2回と、あれだけ荒くて激しい走りしてるにもかかわらず、なかなか壊れないという耐久性もここで実証された。だけど、俺がゴールしてパルクフェルメへと戻り、マシンから降りた時に流した、大粒の涙は、色々な感情が混ざった涙だった。そして天国から最終ラップの最終コーナーまで一緒に戦った、親友の誠真が叶えられなかった夢を叶えた証の涙でもあった。そして、本来動員出来る数より50%を収容できるという条件のもと、観戦しに来た観客からは、惜しみないスタンディングオベーションが贈られた。表彰台に登ると俺は誠真のスナップショットと俺が被った彼の形見でもある「ブロッサム・カローラ」を思いつきり天に掲げ、彼が叶えられなかった夢を俺が叶えた事を天国に居る彼に報告した。そしてシャンパンファイトでは二位に入った、いや、最後の最後まで俺を追いかけまわした晴南が勝てなかった悔しさのあまり、俺に集中砲火をした挙句、背中にシャンパンを流し込むという後輩とは思えぬ行動をとって、周囲を笑いの渦に包んだ。そこからのインタビュウでは、実は俺、ちよつとした悪戯を計画していた。それは宮藤選手のインタビュウ中に合いの手を入れたり、ジャンプしてピースかましたりして、カメラに

写ろうといういたずらだ。そして、そのいたずらを決行する時が来た。宮藤選手が「私  
がここまで来るのに、すごくすごく時間がかかったなと感じてます！今までは、本当に、  
自分は良くても、マシンとかに恵まれてなくて…すいません…優勝は愚か…ポディウム  
なんて夢の…夢のまた夢でした。ですが今シーズンここまで来れたのはハヤテの皆の  
おかげです。」と泣きながら答えた時に、俺が「Yeah!! I know this  
feeling!! hahaha!!」と合いの手を入れたり、ジャンプしてピースを入れ  
ると、思わずインタビュアーも大爆笑。だけど俺にも仕返し…俺も彼女同様に、イ  
ンタビューを受けてると彼女が涙を流して、目が真っ赤に腫れた状態で、よく小学生が  
やる指で角を生やすといういたずらと「さっきのお返しよ!! 喰らえ!!」という声と同  
時に、俺に思いつきり抱き着いてきてインタビュアーも「wow!! こりゃたまげた!!」と  
面白い反応をしてくれた。そして彼女は「王者獲得おめでとう!! ホントは私も表彰台登  
りたかったけど、最後まで輝の後ろ走れてよかったよ。」という俺だって「星奈だつて  
皆イエローフラッグの時にピット入ってるのに唯一ステイアウトするっていうデカい  
ギャンブルをして一時的にトップ走ってたじゃん。俺それ見てて、うわ、しくつた〜ス  
テイアウトしとけば良かったって思った位だよ。」という彼女は少し顔を赤くして  
「そ、そうだけど…私はアレが上手く行くななんて思って無かったし…べ、別に今日の主役  
はアタシではなく輝なんだから、少しでも、場をも…盛り上げようとしただけよ!! と…



とにかく世界王者獲得お…おめでとう!!」と完全に顔から湯気出てる状態で話していた。こういったことが出きるのも最終戦ならではだろう。そして俺は彼女に「またヤングドライバーテストで会おう。」と声をかけ彼女も「またアブダビで会いましょ!今度こそアンタを打ち負かてやるんだから!!」と、完全に俺に対する対抗心を燃やしてる状態だった。俺も「またあの時みたい楽しくやろうぜ!」と返事を返した。そしてガレージに戻ると記念写真を撮り、その後、アイロツトもやってきて、俺を祝ってくれた。そして俺は、アイロツトに「そーいやあお前、来季はフェラーリのリザーブになるみたいだな。」というチームメイトは「うん。」と返事をすると俺に「リザーブっていつたいどんな仕事なんだ?」聞いてきた。俺は「簡単に言うて野球で言うベンチ。だけどお前あれだろ新生DTMにフェラーリのハコ車でのワークスチームAFコレセからエントリーするみたいじゃん。アルボンとローソンと一緒に。」と返すとチームメイトは「そうなんだよ。でも、人生初のGT3カーに乗れるから、凄くワクワクしてる。」と返してくれた。そしてチームメイトから俺に「F1に行っても頑張れよ!」と励ましの言葉をかけてくれるワンシーンも。そして、まさに異例づくめでもあり、激動のシーズンだった、今シーズンのFIAF2世界選手権は、無事に幕を閉じた。そして俺のマシンはギアボックスなどを修復されてポストシーズンテストへと持ち込まれる予定だったが、ファクトリーでそのまま展示するとの事になった。この為ヴィルトウオーシは、新たにマシ

ンを調達してカラーリングとセッティングは最終戦仕様のままポストシーズンテストへと持ち込まれ、ドライバーには俺と一緒のホンダ育成ドライバーでもあり、俺の後輩でもあり、2020年のFIAF3ランキング2位でもあり、俺の教え子でもある、西木野絵梨子選手がテストドライブをする事になった。そして2号車は、晴南の教え子でもあり、一昨年のFIAF3ランキング3位の絢瀬愛乃（よしの）選手のホンダ育成兼レッドブルジュニアドライバーでもある2名がテストドライブする事となった。ちなみに、俺のチームの場合、情報漏洩防止の為、壁を作つてあるが、もう1つ理由があつて、それは、自分でセッティングを探る力を身につけたりする為という理由である。でも実際に壁があつた方が、周りを気にすることないからすぐく落ち着くんだよ。それと岩佐君に限つては、なんと俺に次ぐレッドブルジュニアドライバーの為、メットやスーツがレッドブルのやつになつてゐる。そしてその2人も、このF2という世界を戦い王者を目ざして駆け抜けるのであつた。俺は、ベルギーにあるスパ・フランコルシャンへと行き、あいつが眠りしラディオンへと向かい花を手向け「お前と交した約束果たして来たぜ。ありがとよ。今度はF1で大暴れしてくるからさ、また力をくれよ。」と言ひラディオンを後にした。そしてこの物語は新たな世代へと受け継がれ、新たな歴史を紡いでいくのである。そして新たな物語も。

# Round 13 エピローグ

前回の最終戦で、遂に念願の王者を獲得して、晴れてF2を卒業する事になり、ヴィルトウオーシの皆にも別れを告げて、第3の故郷イタリアへと住処を戻した訳だけど、今回はアルファタウリの本拠地でもある、ファエンツアに拠点を置く事にした。そしてまずアルファタウリのファクトリーへと向かい、改めて皆に自己紹介等をする、何やらかなり見慣れた人が1人こちらへと向かってきた。そして俺に「今シーズンからここでお世話になるという、噂の日本人ドライバーは君かね？」と尋ねられ、俺は「はい。その噂の日本人ドライバーというのは俺の事ですけど。」と返すと、その人の口からとんでもない名前が飛び出してきた。「私の名前はフランツ・トスト。恐らく君の事だから名前を知らない訳ないよね。1回走ってるんだからさ。」と言われたもんだから、まあ俺は驚きを隠せなかった。実はフランツ・トストさん、日本のファンからはトストさんやらトスト爺さんやらトス爺やらという渾名で親しまれている。そして俺の場合は、レッドブルジュニアドライバーとしては初の日本人ドライバーとして、このマシンに乗るという事から、メディアからはかなり注目されているが、はつきり言うとあまり注目しないで欲しいくらいである。理由としては、常にこの事ばかり考えてしまい、他の事に集中

出来ないからだ。そして待望のマシンお披露目のお時間となった。紺色のベールを脱ぐとそこには俺がヤングドライバートストで乗る予定の「スクーデリア・アルファタウリ・AT01ホンダ」が現れた。そしてマシンには、あの時初めて鈴鹿で公式セッションデビューした時と同じ位置に、自分の名前「H i k a r u K u s h i m a」と目の丸が貼られており、遂に子供の頃からの夢だったF1ドライバールになれたと改めて実感出来た。でも俺自身実は、F1に乗るのはこれが初めてではなくて、実は2年前にまだアルファタウリがトロ・ロツソの時にマシンをテストドライブした事があるけど、その時よりマシンは格段に進化していた。まずはシート型の型どりをを行い自分に合った最適なシートを作り、ステアリングのレクチャーをしたのだけど、まあ操作するボタンが多い。F2は必要最低限の物しか備わってなかったけどF1の場合はレース中にエンジンマップを変えたり勝つ為に色々求められるのだけどそれ等を冷静にこなす事もこの世界で求められている。だけど最初に見た際俺が言ったのは「2年前とステアリング変わった？」と言うとメカさんの1人が「ああ変わったよ。利便性と見やすさ向上を目的にね。昨年からだけど。」と言われて俺は「だからレッドブルのマシンのステアリングと酷似していたのか。」と納得してしまった。そしてレースを戦う上で必要不可欠となるのがドリリンクシステムだ。このシステム抜きに俺は2時間戦えない。実はこのシステ

ムは標準装備となっている。まあ一部ドライバーを除いてだけ。そしてもう一つ必要不可欠なアイテムがある。そうパワステである。これ、あると無いとじゃ随分変わる。でもF1のルール上では油圧式オンリーとなっておりこの背景にはかつて電動パワステを使つて人外的挙動（カクコンコーナーリング）でシーズンを征服したというメーカーがいたからという都市伝説じみた事例があるからとの事。そんな文明の利器を持つてしてもハンドルは重いのだ。それと油圧式の方が整備も楽という観点からだろう。実は俺、日本GPのフリー走行2回目で初めてF1レーススイークデビューをしたのだけどこの際トスト爺さんが俺の走りに終始釘付けになっており来季の起用を決めたとか。でも実はこの背景には俺の途方も無い苦勞と努力があつたからだろう。そしてシートを作り終えてその次にシートベルトの要望を伝えた。俺は「シートベルトのメーカーをタカタにして欲しい」と頼むと1人が「何でだ?」と尋ねて俺は理由を言った。「体にフィットしやすいため。」とそれだけの事だよ。と。そう話すとメカさんの1人が「こういう事も大切だからね。」というやり取りをしていた。そしてファクトリーでの一通りの準備を終えて俺達御一行はヤングドライバーテストの舞台でもあるアブダビサーキットへと向かうのだった。

## Round 14 エピローグその2

前回アルファタウリのファクトリーにて来季のマシンのシート合わせ等色々やったが今回はその裏側。あの最終戦からしばらく経ち俺は第3の故郷イギリスから再び第4の故郷イタリヤへと引越す準備とかをしていた。そして今日は恐らく人生5回目の引越す。まずは、自分の周りを片付ける事にした。まずはダンボールに緩衝材をこれでもかと言うくらい敷き詰めてその中にヘルメットとHANSデバイスを入れてガムテで封をしてまず1つは片付いた。そして普段着は普段着で1つの箱にまとめて蓋をして片付けた。さあ問題はレーシングスーツをどうまとめるかだ。色々悩んだ挙句今まで所属したチーム順に上から重ねていき事態は解決した。そして後は家電類とか色々片付けてこれで綺麗になった。後は溜まった埃は、掃除機をかけて、これで最初来た時みたいに綺麗になった。後は全部まとめてイタリヤのファエンツアへと引越すのみとなったが、肝心な晴南の事を忘れていた。俺は慌てて晴南に連絡を取り「引越すしの準備とか終わったか？」と言うと晴南も「ちようど今終わったばかりで、へトへトですよ。レースやトレーニング以外でこんなになるの初めてですよ。」とかなり疲れていた模様。そう実はF1参戦にあたって拠点をチームの本拠地ファエンツアに移す事

にしておりそこで2人して住むという計画を立てていたのだ。そして俺は全ての作業を終えて外に出てリフレッシュしてるとお隣さんが「おや？また引つ越しかい？」と話しかけてきて俺は「はい、これで2度目のイギリスでの生活ともおさらばしなければならなくなつたので。」と言うとお隣さんは「寂しくなるね。でもあの2連戦は楽しませて貰つたよ。最後の最後まで目が離せなかつたわ。特に最終戦のゴールした後は思わず泣いてしまつたよ。」と言うと俺も「あの時は本当にとにかく嬉しくてヘルメット越しに泣いていて7年前とは違う景色が見えてましたから。」と言うとお隣さんも「7年前もあの時も見えていたよ。」と言いそんな会話をしている俺は「そろそろ旅立つ時が来たみたいですよ。今までありがとうございました。いつかまたどこかで会いましょう。それでは」と言い俺は1度ロンドンにある日本大使館へと向かい引つ越しの手続きとか色々していると大使館の人が「今度はどこの国に行くんだい？」と話しかけてきて俺は「またイタリアへと」と言うとお隣館の人は「あつちでも頑張れ!!」と励ましてくれた。ちなみにまとめた荷物は2人揃つてファエンツアにあるアルファタウリのファクトリー近くに家に送るようになっているからファエンツアに着いた頃には届いてるはず。そして俺と晴南はヒースロー空港へと向かい、そこからイタリアへと向かいそこからファエンツアへと向かつた。そしてファクトリー近くの家に向かいちやんと全部届いてるかを確認し終えてこの日を終えた。でも1番楽なのがイギリスはとうの昔にEUから離脱して

るおかげで共通通貨「ユーロ」が使えなくなるんじゃないかとビクビクしてたがそんな問題は無く普通に使えた事。そしてイタリアもEU加盟国の為ユーロが使える為とリアええ資金面は困る事は無さそうだ。実は俺自身これで2度目のイタリア生活を送る訳だが晴南は恐らくこれが初めての2ヶ国目だから俺が説明してやらないといけないしなくなった。そして一通り説明して迎えた次の日。この日はファクトリーに行き自分のスペースとかを確保してきた。後、今日は快晴どころか地中海気候のおかげでも暖かい日になっていて「自由猫」と戯れる絶好の日和となった。晴南はどうやら「自由猫」というのを知らないので俺が晴南に「日本で言う野良猫みたいなもん。だけどこっちは人慣れしすぎて警戒心が無い。」というと晴南も納得していた。そしてレーシングギア一式は自分のカバンやバックにぶち込んでありちゃんとするかどうかも確認した。ちなみに空港では到着してすぐにロストバゲージしてないか確認してイタリアへと来た為心配する必要はなかった。そしてまずは現地に到着して最初に向かったのが日本大使館。そこで必要な手続きとかを踏みイタリヤ生活をスタートしたという訳だ。ちなみに大使館で手続きとかをし終えた後にサイン色紙をプレゼントすると皆すごい反応を示してくれて職員からも「記念に飾りましょうよ!!」という声上がり飾ってもらえることになった。そんなかなり急ピッチで物事を進めていたイタリアでの新生活も今日から無事にスタートする事が出来た。本当は日本で暫くの間落ち着いてからしよう



思ってたけど、このご時世だから早い事終わらせたかったのだ。と言っても自主隔離期間中に身動きが取れなくなるリスクを考へてもその期間で物事を済ませたかったという俺の考へもあり敢えて日本には行かずそのままイギリスへと直行してこういったことをしていた。変に外出して警察のお世話になるよりはマシだと思つてやった事だ。そしてなぜ2人で住むかと言うと理由は同じチームになつて情報共有とかを円滑にしたいのと2人して反省会をしたりするという目的もあるからだ。後は2人のオンボードとかを見比べたりとか色々したいからだよ。

## 特別企画 今シーズンのエントリールイスト及び各チーム 毎のプレイバック

今シーズン、激動の全12ラウンドを戦い抜いたドライバーとチームを今回は一挙公開!!

S  
まずは、昨シーズン、チームタイトルを獲得した、フランスの老舗強豪チームDAM

No1 リオ・ゲラエル (Rd1〜6, 11〜12) (インドネシア) (22歳)、マルコ・ヴィツプス (Rd7〜10) (ルーマニア) (エストニア) (20歳) (バルセロナで胸骨折ったゲラエルの代替)

シャシーナンバーは、昨年のキャリーオーバー。

No2 アレックス・テイクタム (イギリス) (21歳) (フル)

シャシーナンバーは、昨年のキャリーオーバー。

このチームは今年この3人で走ったけど、いかんせんDAMSらしさがそんなに無かったような感じがする。マルコに関しては、当初スーパーフォーミュラにチーム無限

から出る予定だったけど、コロナの影響で立ち消えに。だけど、初めてのF2の割には、ポデイウム取ったりしてるから、今後かなり化ける可能性大！

そして今シーズン、圧倒的な強さでシーズンを支配した、ユニ・ヴィルトウオーシ

N03 九嶋 輝（日本）（17歳）（フル）（ワールドチャンピオン）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

N04 アンドリユー・アイロツト（フル）（19歳）（イギリス）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

このチームは今年かなり強かったし、レッドブルジュニアの俺が、念願のF2世界王者にもなった。けど問題は、俺がアイロツトによる、通称「命知らずミサイル」を何度も喰らいかけていた事。本当にフレンドリーファイアだけは勘弁して欲しかった。でもちよくちよく表彰台獲得してるといふ点は褒めたい。

なんか今シーズンは、妙にしよっぱい結果しか残せなかった、俺の古巣、ART G  
P

N05 クリスチャン・アームストロング（ルーキー）（オーストラリア）（18歳）（フル）

シャシーナンバーは、F218-041

N06 マーカス・ルンガー（デンマーク）（21歳）（フル）

シャシーナンバーは、F218―050

このチームは、今年なんか妙にしょっぱいというのかしつくりきてるのか来てないのか、よく分からん結果しか残せなかった。多分単に18インチタイヤに慣れてないだけなのかもしれない。強いて言うならルンガーが2勝したくらい。

今シーズンは、日本人ドライバーコンビで大健闘した、カーリン・レーシング

N07 角田 愛咲（フル）（17歳）（日本）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

N08 佐藤 晴南（フル）（17歳）（日本）

シャシーナンバーは、昨年カンポスで乗った個体のキャリアオーバー。

このチームは今年、日本人女性ドライバーコンビというF2史上初の事をやってのけた。その結果、晴南が初めてのフル参戦ながら、年間ランキング3位を獲得してF1のシートを射止めたのは記憶に新しい。

今シーズンは、何か、イマイチ目立った活躍をしてなかったカンポス

N09 ニック・エイトキン（キム・セヨン）（23歳）（イギリス、韓国）（Rd1〜

10）、ライアン・ボシュン（Rd11〜12）（スイス）（24歳）※エイトキンはイギ

リスと韓国のハーフの為、韓国名もある。

シャシーナンバーは、F218―048

No10 ステイブ・サマイア（ルーキー）（フル）（25歳）（ブラジル）  
シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

このチームは、今年何故か低迷していて、サマイアに関しては、「えっ、お前居たのか。」と、ほほ風のような存在であった。エイトキンに関しては、F1の最終2ラウンドにラッセルのシートを埋める形で、ウイリアムズからワイルドカードエントリーを果たした。そしてそのシートを埋める形で、ボシユンが緊急参戦及び、来季のシートを掴むと言った、一大イベントも起きた。

今シーズンは、目立った活躍をしなかったというより、常時下っ端もしくは、良い感じの順位を走ってた、チャロウズ・レーシングシステム

No11 ルカ・デレトラズ（フル）（22歳）（スイス）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

No12 ルイス・ピケ（ルーキー）（フル）（18歳）（ブラジル）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

このチーム程、今年目立ったところないよ。マジで。強いて言うならデレトラズが表彰台登ったくらいよ。

今年にはホンダの支援なく、単身F2に乗り込んできた松浦伸治さんが所属していた、MPモータースポーツ

No14 松浦信治 (Rd1〜9) (日本) (25歳)、アントワーヌ・アレジ (Rd10〜12) (フランス) (22歳)

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

No15 フィリップ・ドルゴビッチ (ルーキー) (フル) (18歳) (ブラジル)  
シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

このチームは今年かなり良い所を常にキープしてたりと結果を残していたが、ベルギーのレース1で松浦さんとフィリップが同士討ちをやらかして、その結果、松浦さんが金欠になって、シーズン途中のムジエロGPで、強制ログアウトせざるを得ない状況になってしまったのは、残念な限りだ。

昨年限りで撤退したアーデンの枠を引き継ぐ形でエントリ―したBWT HWA  
レースラボ

No16 ニキータ・マルケロフ (フル) (ロシア) (22歳)

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

No17 アントワーヌ・アレジ (Rd1〜9) (フランス)、アンソニー・ヒューズ (Rd10) (ルーキー) (イギリス)、ジャック・プルシエール (Rd11〜12) (ルーキー) (フランス) (16歳)

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

このチームは、元が元だから結果は察して欲しい。けど、「ザウバーの逸材」であるブルシエルが、今シーズンのF2のラスト2戦にエントリーした時は、かなり話題を呼んだ。それと、アレジの活動資金捻出の為に、おやっさんが愛車である、フェラーリF40を泣く泣く売っぱらって活動資金を捻出したが、それも虚しく、FDAに無駄金を吸い取られる事に。結果として、おやっさんのF40は、やむ無く犠牲になってしまったのだ。合掌。

今シーズンはチームタイトルを獲得したプレマ

No20 ミケレ・シューマツハ（フル）（ドイツ）（21歳）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

No21 ウラジーミル・シユバルツマン（フル）（ルーキー）（ロシア）（19歳）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

このチームは今年チームタイトルにしたし、シューマツハも強かった。けど相手のシユバルツマンは、なんか地味な所にいた事が多かった気がする。シユバルツマンよ、FIA-F3時代の威勢の良さはどこ行つた？

おまたせ。テールエンダーだけいいかな？トライデント

No22 タルソ・モレノ（フル）（ブラジル）（23歳）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

No23 坂口 万璃音（ルーキー）（フル）（日本）（20歳）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

このチームのテールエンダーぶりは、もはや名物。だけど坂口選手もムジエロで執念の8位入賞をしてポイント獲得。そして、久方ぶりにカムバックしたモレノは、最終戦レース2で、明らかに周りに比べて、戦闘力に劣りまくってるマシンを巧みに駆使して、3位表彰台を獲得した。

今シーズンは新たに、日本のチームで初めて、ユーロ・フォーミュラ・オープンに参戦している、クリプトタワー・レーシングとタッグを組んでエントリーした、チーム・ハヤテ・クリプトタワーレーシング

No24 宮藤星奈（フル）（日本）（17歳）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

No25 李一飛（リー・イーフェイ）（フル）（中国、日本）（17歳）

シャシーナンバーは、昨年のキャリアオーバー。

このチームの一番の見所はやっぱり2人の優勝であろう。特に星奈（きらな）はキャリア初優勝を飾った事が大きいし、最終戦前の死闘も記憶に新しい。特にイーフェイはこのチームの参戦初年度からずっと居るし、すごく頑張ってた。それとその努力の賜物として日本語もかなり上達していた。にしてもだ、井口さんもやるねえ。クリプトタ



ワーレーシングとタッグ組んで戦うなんて。と言っても、クリプトタワーは、元々がモトパークの為、実質モトパークとの合同チームとなっている。

※年齢は、エントリーリストに記載された時の年齢です。

2018年4月。この世界に突如現れた「音速のシューティングスター」。彼は、3年越しに夢を叶えた。誰よりも速く、誰よりも強く、誰よりも輝いていた。亡き親友と二人三脚で歩んだ3年間。激動の3シーズン。学校なんかでは、絶対教えてなんてくれない。ここには、喜怒哀楽、様々な感情や自分が導き出した、「勝利の方程式」がある。その答えを知ってるのは、自分自身。そして、F2には「夢」がある。「感動」がある。「希望」がある。「ドラマ」がある。君がいたから「混沌」がある。美学がある。政治がある。経済がある。科学がある。技術がある。そして「ほんの少し愛がある。だからちよつぱり涙が出る。」勝者と敗者、嬉し涙流す傍ら悔し涙流す者もいる。心で泣いて、笑顔見せる。そんな時もある。時に喜び、時に怒り狂い、時に哀しみ、時に楽しむ。今、この「勝利の方程式」を解き終えた自分自身の目には、何が見えてるのだろうか？夢叶う者もいれば、夢敗れた者もいる。だけど、ここまで戦ってきた事は、決して無駄では無かったという答えに辿り着くはず。優しさよりも、言葉よりも、「小さな希望」に全てを賭けた者もいる。時に迷走して、自暴自棄になつた事もある。あの日流した涙は、「光のプリズム」となり、自分自身を照らし、さらに輝かせている。今シーズンの全てを物語つ

た「最終戦」。各々の全てを出し切る。そう皆で決めて挑んだこのレース。例えばどんな順位で走ろうと、各々が放つ、最大限の輝きがサーキットを「彩った」。ゴール後、皆の目には、一体どんな景色が見えたんだろう？死闘を終えたその先には、一体何が見えたんだろう？きつと、色んな感情が混ざって分からないよね。ある少年は「夢」を叶えた。そして、パルクフェルメで流した涙は、色んな感情が混ざっていた。そして、F2は「新たな世代」へバトンタッチして「新たな歴史」を紡いでいく。嗚呼なんて美しいのだろう。「限らない可能性」にかけてみたい。その答えは、間違えてない。その「限らない可能性」は、いつか実を結び、やがて「夢」となる。3シーズン、1095時間、36レース。共に戦った皆に、この言葉を伝えたい。「共に戦ってくれて、ありがとう。」そして、この言葉を伝えたい。「時代は常に、未来への一方通行。明日に背中を向けて、歩んだ過去を確かめる旅路、この道の続きでいつかまた会おう。」